

自閉症スペクトラム障がい傾向の自伝的記憶における無意図的想起の特徴

Characteristic of the involuntary autobiographical memory
in the tendency of Autistic Spectrum Disorders

宇佐美 留理子 (Ruriko Usami) 指導：佐々木 和義

【問題と目的】

自伝的記憶の想起は、記憶の再生過程において再体験の感覚を伴った再生 (Tulving, 2002) といわれている。自伝的記憶には2つの想起形態があり、「思い出そうとする意図」を伴う意図的想起と、「意図せずにふと思い出す形態」の無意図的想起がある (Berntsen, 1996)。

自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorders: 以降ASD) のフラッシュバックも想起意図がなく負の体験が意識にのぼる形態 (橋本, 2014) なので、ASD傾向者の自伝的記憶の無意図的想起を調査することは有効と考えられる。

本研究は機械的で優れた記憶力を有する (Kannar, 1943) といわれるASD傾向者において、自伝的記憶想起にどのような特性があるのかを、性差もふまえて調査・検討することを目的とした。

【方法】

調査対象者：大学生85名 (男性32名女性53名)

調査材料：①自閉症スペクトラム指数日本版短縮版AQ-J-10 (Kurita et al., 2005) ②改訂版自伝的記憶の主観的特性質問紙 (Subjective Properties Questionnaire of autobiographical memory: 以降改訂版AMSPQ) (関口, 2012)

手続き：「ふと思い出した出来事をどのように感じているかを調査するものである」と教示し、講義後に質問紙を配布した。(学内倫理委員会承認番号2015-131)。

【結果】

AQ-J-10 (以降AQ) の群分け AQ得点±1SDでAQ高群・低群と分けた。AQ高群は20人 (男性14人, 女性6人), AQ低群は20人 (男性7人, 女性13人) であった。

改訂版AMSPQの因子分析 探索的因子分析で5因子構造となり、「再体験感」・「知覚的再現感」・「記憶の再評価」・「部分的詳細さ」・「言語的ストーリー性」と命名した。

自閉症スペクトラム傾向と自伝的記憶の主観的特性との関係 AQと性差を独立変数とし、改訂版AMSPQの各因子合計点を従属変数とした2×2の分散分析を行った。

第1因子「再体験感」はAQに有意な主効果が認められた (AQ低群<AQ高群)。第2因子「知覚的再現感」はAQに有意な主効果が認められた (AQ低群<AQ高群)。第3因子「記憶の再評価」はAQと性差において主効果・交互

作用ともに有意な差は認められなかった。第4因子「部分的詳細さ」はAQと性差において主効果・交互作用ともに有意な差は認められなかった。第5因子「言語的ストーリー性」はAQ高低群と性差に交互作用が認められた。単純主効果の検定でAQ高群における性差の単純主効果に有意な効果が認められた (AQ高群女性>AQ高群男性)。性差では、男性のAQ群間における単純主効果に有意な効果が認められた (男性AQ低群>男性AQ高群)。

自閉症スペクトラム傾向と自伝的記憶の無意図的想起における視点 人数比率を検証するために、2 (AQ低群・AQ高群) × 3 (自己視点・俯瞰視点・両視点) の χ^2 検定を行ったところ、有意な差は見られなかった。

自閉症スペクトラム傾向と自伝的記憶の無意図的想起における画像記憶 人数比率を検証するために、2 (AQ低群・AQ高群) × 3 (動画的記憶・静止画的記憶・両画像記憶) の χ^2 検定を行ったところ有意な差は見られなかった。

【考察】

自伝的記憶の無意図的想起におけるAQ低群と高群の傾向を調査・分析を行い、AQ高群が鮮明な再体験感と知覚的再現感でエピソードを生起させていることが明らかになった。このことは、ASD傾向者が過去の負の体験を無意図的に想起した場合のフラッシュバックやパニックにつながっている可能性も示唆される。AQ高群の男性はエピソードを言語的にストーリー化することが困難だという一面が明らかになった。よって、記憶を言語化して自己の立場と他者との関係性を明確にすることで自己理解と他者理解につながり、記憶の意味付けが可能になる事が示唆される。

ASD傾向の女性が言語の流暢性に問題がないことは先行研究を支持する結果になった。ASD傾向の女性は幼児期に気づかれにくく、支援のチャンスを逃しやすい (神尾, 2005)。ASD傾向者の男女における状態像に違いがあることから、ASD傾向者の女性に関する研究が課題とされよう。ASD傾向者の視点・画像記憶の分析では調査対象者が少ないため、 χ^2 検定の検出力が低下した可能性も考えられるため、今後の課題としたい。ASD傾向者の記憶特性に対する研究は乏しく研究方法が確立していない。ASD傾向者の記憶特性の研究することで臨床像を明らかにし、具体的な支援に繋げることが必要であると考えられる。